

# 小学校「社会科授業」の充実を目指して

## —社会 I A・I Bの授業を通じて—

深澤 直明

概要：小学校で社会科の授業を行なえる能力の育成を目指す社会 I A・I Bの授業を担当してきた経験から、小学校教員を志す大学生に施すべき教育について論じた。まず、小学校社会科の授業は「地域」教育が最も重要である点を強調し、各地域で編まれた副読本を十分活用するよう指導してきた。次に、年間の指導計画の重要性を強調し、教育実習の際に課される研究授業も指導計画に位置付けられた単元に則して行うよう指導してきた。特に実習生がつまづきやすい学習指導案の作成については、単純に子どもに「正解」を教えるだけの授業を目指すのではなく、子どもの思考力・判断力・表現力の育成も視野に入れながら、指導案自体をひとつの作品に仕上げるつもりで取り組むように指導してきた。最後に教師の構えとして、「相手の心をつかみ、自分の心を伝える」ことが上手にできるカウンセリングマインドを持った教師を目指すように指導してきた。(387字)

キーワード：学習指導案作成，地域，教育実習，カウンセリングマインド

### はじめに

私は、教員志望（主に一年生）の学生に対して、単に教員免許状の取得のためだけではなく、将来教員になって、社会の授業において確かな力を発揮することができるように、ということを常に念頭において、小学校社会科の授業を担当できる能力を培う目的で設置された「社会 I A・I B」の授業を担当してきた。

そこで一番気になったことは、学生自身が、「小学校社会科の授業」をどう捉えていて、どう取り組もうとしているのか、その方向が見えていないということである。「学習指導要領とは？」「教材とは？」「単元とは？」等を曖昧にしたままこの授業を進めていくと、混乱を深めるだけであると考えた。

そのため、毎回の授業において、出欠の確認を兼ね、その時間の内容について、「理解したこと」「疑問に思ったこと」「その他」の項目を設けて、素直な意見を書いてもらうようにしている。その中で、特に「疑問に思ったこと」の項目には留意して、その解決に向けてコメントを入れながら、より質の高い「小学校社会科の授業」の在り方について考えるような指導に努めてきた。

学生の多くが持っている疑問は、以下のようなことである。

- 社会科の授業は、どうやったらいいか、よくわからない。
- 学習指導案とは、どんなものか、また何故必要なのか。
- 教育実習に対する不安。

これらの疑問に応えながら、一人一人の学生が、これからの教師としての資質をより確かなものにするために、これまでの私自身の教育実践を分かりやすく伝えるときにも、学習指導案作成を中心に、個々の「授業力」の向上を図っていきたいと考えた。

## I 担当授業の概要

私が担当した「社会 I A・I B」は、以下のような計画で授業を行ってきた。

1. 教材について（3～6年の教材について、その目標・内容、各学年との関連）
2. 指導計画について（学習指導要領・教科書・副読本等、具体化への流れ）
3. 学習指導案の作成（授業力向上のための基本的作業）
4. 模擬授業の実践（授業者・児童・観察者としての体験）
5. 教師としての構え（学び続ける教師としての基本的姿勢）

授業の始めには、学生に対して必ず、小学生の時の「社会科」という教科に対して、どのような意識を持っているかを問うてみるのだが、ほとんどの学生から「あまり好きではなかった」「興味や関心を持って取り組んだという記憶はない」という声が聞かれる。ただ中には、「社会科見学でいろいろな所へ出掛けたことは覚えている」という類の話は、わずかながらある。

このような学生に対して、前記のような計画で授業を進めるわけである。学生にとっては難しいと思われる所が多々あるだろうと感じる。しかし、学生たちは卒業後に教師として、社会科の授業をやらなければならない。そのためには、まず彼ら自身が「社会科」に対して興味・関心を持ち、意欲を持たなければならない。そうでなければ、指導される子どもたちにとっては、不幸なことである。

そのような考えの下で、計画的に進めた授業について、学生の表情や反応を基に考察を行ってみた。

## II 授業の進め方

### 1. 教材について

まず、小学校の社会科において、どのような「教材」を使うか、明確にしておく必要がある。

最初に、「小学校学習指導要領」第2章第2節の「社会科の内容」について大まかに捉えさせる。この「学習指導要領」に基づいて各教科書会社が教科書を作成し、文部科学省の検定を通過したものの中から、各県・市・町・村が採択し、子どもたちが使用することになる。この流れのなかで、学生たちに小学校時代に使用した教科書がどのようなものだったかたずねても、記憶は薄れてしまっている。そこで、大学にある古い教科書を数十冊準備し、閲覧させる。そうすると、かすかに思い出す学生もいるが、ほとんど覚えていない。せいぜい特定の単元を思い出すだけである（しかもこの時、学生は「単元」の意味も分かっていないの

だが)。もう一点特筆しなければならないのは、「副読本」の存在を忘れていているということである。副読本は、小学校教育においては不可欠である。3年生から始まる「社会科」において、最も留意しなければならないことは、「地域」に眼を開くことである。副読本は、各地域版の教科書と言ってもよいだろう。今、使用されている一般の教科書は、日本の中のある一地域を採りあげて作られている。つまりモデル（雛形）である。それをそのまま授業で扱ってしまうと、子どもたちは「自分には関係ない、よその事」と受け取ってしまい、授業が表面的なことに終始してしまう危険性が生じてしまうのではないかと考えられる。

私自身、かつて副読本の作成に携わってきた一人であるが、子どもは、自分の身近なことであれば、自然に食いついてくるものであることを嫌というほど体験してきた。授業においては、教科書と副読本を上手に併用していくことが重要だと考えている。しかし、最近の学校の様子を見てみると、あまり副読本を使用せず、教科書に依存し過ぎている場面が多いように思われる。それによって、国語的（？）社会科が増えてきたのではないかと考えられる。

教科書もよく覚えていない学生に副読本についてたずねても、覚えている学生は数人である。社会科のどの教材を使うにしても「まず“地域”から、子どもたちの生活している“地域”から」と口を酸っぱくして学生に訴えるが、なかなか伝わらないのが現状である。

学生から、「3・4年生は地域のことを学ぶにしても、5年生、6年生になったら、県や国、そして世界について学ぶのではないですか？」という質問を受ける。そんな時、私はいつも「どんな教材でも、自分の生活している地域。そこからスタートする方が、子どもは『食いつきやすい』と思う」と答えている。

例えば、6年生の歴史的分野の学習について考えてみる。「三ヶ日人」について学ぶ時、浜松市の三ヶ日近くの小学生は、意欲的に学習を進めることができるだろうし、登呂遺跡の学習では、静岡市近辺の小学生は、他の地域の子どもとはその「学び」が大きく異なるはずである。古墳時代を学ぶ時、日本中の多くの小学校では最初から大阪府堺市の大仙古墳（仁徳天皇陵）を採りあげて、その大きさや作られた背景を追求するような授業が一般的であろう。しかし、大阪府堺市付近の子どもたちは、身近な古墳が教科書に大々的に載っていることから、自信を持って活発な活動をして学ぶことが予想される。しかし、遠く離れた静岡の子どもたちは、やはり「よそ事」と受け取ってしまうのではないだろうか。

そんな時、「自分の家の裏山が実は古墳だった」ということを子どもが知ったらどうだろうか。学習意欲は一変するのではないだろうか。静岡県にも、全国に負けず劣らず古墳は数多く存在している。このことは副読本にもあり、昔出された『静岡県の歴史』の中にも多く書かれている。

具体的な教材については、私がかつて小学校3年生～6年生の授業で扱ったものを題材に、どんな教材で、どのような授業を行ったかを説明しながら、学生のイメージを広げていくことに努めてきた。そうした試みを通じ、学生に対して、もっともっと「身近な所」からと強調してきた結果、少しずつ自分の地元に目を向けるようになってきていることは、明るい材料といえる。

## 2. 指導計画について

各学校においては、学習指導要領に示された目標・内容を基に、使用教科書等を参考にしながら、学年・教科ごとの年間指導計画を立てて、毎日の授業を行っている。

平成17年に、静岡県教育委員会では「静岡県版カリキュラム」を作成し、「確かな学力」をはぐくむために、教師一人一人が子どもたちに確実に身につけさせたい知識・技能と思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲などを具体的かつ明確に意識して授業を行うことが大切であるとしている。それから、各学校に対して、ここに示した内容が、子どもたちに確実に身につくよう、年間指導計画の作成や授業の工夫改善に努めて欲しいと補足している。

社会ⅠA・ⅠBの授業では、どの学校でも学習指導要領、教科書、副読本を基に指導計画を立て、毎日の教科・授業を意図的・計画的に行っていることを理解させ、単に思いつきやひらめきで授業を行っているのではないことを伝えている。ここで学生が理解に苦しむのは、「単元」という言葉である。これについては、詳しく説明し理解させるように努めている。

私の所属する常葉大学教育学部教職支援センターには、現在県内で使用されている小・中学校の教科書が全て取り揃えてある。教育実習に赴く前の3・4年生の学生が同センターでは多く見える。理由は、「どこを研究授業で扱うか分からないので、調べている」ということである。私は、「学校では、指導計画の下で授業を行っているのだから、学校へ行ってから指導計画を見せてもらい、どのような計画で、教科書、副読本等をどのように利用しているか確かめながら、研究授業に臨むとよい」と助言している。教育実習に行く3・4年生の現場理解でもその程度なので、私の授業対象者である1年生では無理なのかもしれないが、今の段階からそのような指導計画があることを理解しておくのは大切であろう。

しかし、実際に教育実習の立ち会い等で様子を見てみると、計画が細かな所まで行き届いていない学校が少なからずある。授業は、意図的・計画的に進めなければならない。このことは、1年生の段階から、きちんと押さえておくことが不可欠なことであると考えている。

## 3. 学習指導案の作成について

この時間は、私自身、最も力を入れなければならない所だと思っている。なぜなら、学生のこれからの教師人生にとって「命」とも言うべきものは「授業」であり、それを根底から支える「学習指導案」であると考えられるからである。

しかし、私の意気込みとは裏腹に、学生の反応は冷ややかであった。

○学習指導案とは、どんなものか分からない。

○毎時間、書くのか。

○指導案通りに授業が進まなかったら、どうするのか。

等々、次から次へと疑問が出された。

予想はしていたものの、これらの疑問を持つ学生に対して、どう指導していく

のがよいのか、しばし考えさせられた。

そこで、学生に対して、「教師にとって、最も重要なことは“授業”であること」、「その授業の内容や質を上げていかなければならないこと」、そのためには「指導案を書くこと」、そして「自分の“授業力”をつけていくこと」、「教育実習では、それが一番問題となること」等をゆっくり説明して、理解を求めた。

まず、学習指導案の形式については、静岡県教育委員会の「初任者研修資料」を参考にしながら基本的な書式を押さえた後、「本時の指導（展開）」の部分に絞って取り組ませることにした。

子どもたちがいないのにどうやって学習指導案を書くのか、という疑問もあったが、本学教育学部の1年生は「観察実習」で、実際に付属小学校の授業を参観し、子どもたちを見ている。ボランティア活動、塾講師の経験等による子どもとの接触も多い。後は、自分の小学生時代を思い出しながら臨ませることとした。

単元（教材）は、1の所で学んだ中から、自分のやりたいところ（3年生～6年生まで）を選び出して書かせることにした。その際留意点として、①ひとつの単元の中で1時間分の授業にできる箇所を絞り込むこと（その際、できる限り地域が入るようにする）、②1時間の中で子どもたちに追求させたい学習問題を設定すること、③子どもたちにどんな発問をしたらよいか、またそれに対して子どもたちはどんな反応を示すか想定する。この三点を頭に置いて「本時」の欄（シート）に自由に書き込むよう指示した。しかし、多くの学生は全く鉛筆（必ず鉛筆で書かせた。理由は、何回でも修正できるから）が動かなかった。

そこで、かつて私が書いた学習指導案（詳しい部分は消去し「本時」の部分のみ）を配布し、書き方は自由なので模倣するのではなく参照に留めるように指示し、前記①～③が入っていることを確認させながら再度書かせた。ようやく鉛筆が動きだし、なんとか形だけではあるが、ほぼ全員が書くことができた。しかし、数人は書いては消し、書いては消しの繰り返しで、白紙に近い状態だった。

この作業を通して、学習指導案というものは相手（子ども）のことを考えて書かなければいけない、ということを理解したと考えられる。全面書き込むことができた学生も、書いては消して白紙の学生も、同じ成果があったものと確信した。

回収した学習指導案を見ると、大半は身近なことではなく教科書の中の項目をトピック的に挙げてクイズ形式にしたり、一問一答式で最後は解答を教える、というものだった。観察実習やボランティア活動等を通して数多くの「授業」を見ている学生が、どうしてそういう指導案を書くのか疑問を感じた。

その原因の一つに、学生たちがこれまで受けてきた小学校・中学校の「社会科の授業」の影響があるのではないかと考えた。学習指導案作成後、私の意見に対する学生の疑問の多くは、「解答は言わなくてもよいのか」「答えが出なかったらどうするのか」「正解を教えなくてもよいのか」という類のものばかりである。

それに対して、私は以下のように答えている。学習指導要領では、“子どもたちの生きる力を育てること”を基本に、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて“思考力・判断力・表現力の育成”が求められている。知識・技能の習得も大切であるが、「授業」、特に学習指導案を書いて行う研究授業の場合、もう少し思

考力・判断力・表現力の育成を重く考えた方が、子どもたちが意欲的に成長すると思う。また、静岡県教育委員会「確かな学力」育成会議から提言された『静岡の子どもに「確かな学力」を』にも、「教えて考えさせる」授業の推進を求めている。このことから、バランスの重要性を理解して欲しいと思う。

学生にとっては学習指導案作成は大変な作業であるが、一回で終了するものではない。何回も繰り返し書くことで、少しずつ子どもたちに近づいていき、やがては子どもたちの内面まで考えることができるようになる。そのことが教師の「授業力を高める」根本であると考えている。また、学生が3・4年生になって教育実習を迎えた時、必ず行うであろう「研究授業」において、ここで学んだ学習指導案作成によって、無駄な時間を費やすことなく、自分の行う授業について確かな方向性を持って進めていくことができるものと考えている。

この授業の終わりに、以下の資料を渡している（資料中の「授業案」は学習指導案のこと）。

授業案は、授業展開の青写真にあたるものである。したがって授業案をつくるためには、科学的な原則とか法則とかを基本に教師が持っており、それを支えにした青写真をつくっていかなければならないことである。

しかしここでも人間がものをいう。それは、いつでも人間が授業展開の主体になるのだから、展開の青写真も、人間が主体になっていない限り、展開に役立つものにはならないからである。したがって、授業案は、どこまでも人間が主体になり、人間と科学の原則との交流、人間と教材や子どもとの対面のされているものでなければならない。展開の主体者である教師のいぶきとか、子どもたちの声とか、子どもたちの解釈とかが生き生きと動いているものでなければならない。

そのように考えると、よい授業案はかならずつぎのような要素を持っているはずである。

- 1 第三者にも解釈できるような授業案であること。すなわち第三者が読んでも、教材の解釈とか、授業の方向とか、子どもとか、展開プランとかがわかり、第三者にも授業展開の意欲が湧いてくるようなものであること。
- 2 読ませる授業案であること。一つの独立した読みものとして、その授業の世界に読者を引き込んでいくようなものであること。
- 3 第三者にも豊かなイメージが湧いてくるような授業案であること。もちろん授業案は、教材があり子どもが限定されているから、授業案の筆者自体も、小説などのように自由に書くわけにはいかない。しかし書いているうちに、「先生、私はちがう意見です」などという子供の声もきこえてくる。そういう子どもの声や、教材の持つ方向を考えながら、生きた創造、予想、展開は紙の上でされていく。すなわち一つの作品的な創造ができるはずである。したがって読者も、それを追いながら、さまざまな自分のイメージをつくり上げることはできるわけである。そういう授業案になることが必要である。もしそういう、授業案自体が独立して生きているような、

作品的な創造的な授業案が書けないとすれば、その教師には、創造的な独立した授業などできないわけである。

- 4 その人間を感じるような授業案であること。授業者を知らない人にも、その教師の人間とか、その教師の指導している子どもとか、学級とかが、生き生きとみえてくるような個性的な授業案でないとおもしろくない。よいにしろ悪いにしろ、自分を出して授業案を書いたり授業をしたりする教師になることが必要だからである。

私は、授業案には右にあげたようなものがふくまれていることをのぞむのだが、授業案を書くにあたって、さらに心がけなければならないと思うことはつぎのことである。

その一つは、授業案は、何よりも自分のために書くのだと考えることである。文章を書くことは自分と対話することである。書くことによって自分との対話をし、自分の考えなり方向なりをはっきりさせていくことである。そういうつもりで授業案を書くことが必要である。（斎藤喜博全集 6, p183～p185）

この資料は、学習指導案が何たるかも定かでない学生にとっては不可解なものであるかもしれない。しかし、教師を目指す学生に対して授業力をつけさせていくことは、最大の課題である。今はよく分からないことであっても、いつか理解できる時が来ると信じている。

私がこの授業にこだわるのには、もう一つ理由がある。それは、これまでに多くの教育実習生の様子を見てきた経験があるからである。

かつて教頭や校長を務めていたころ、毎年数人の教育実習生を受け入れてきた。3～4週間の実習の中で、実習生が一番緊張し、精力を費やすのは「研究授業」である。最初の週は何もかもが新鮮で、夢中で子どもたちと過ごしているが、だんだん終わりに近づくとほとんどの実習生の表情が厳しくなってくる。それは「研究授業」が迫ってくるからである。実習生と指導教員にはいつも気を配りながら状況を注視していたが、（指導教員の指導力の如何にもよるが）ほとんどが「指導案の作成」でつまづくことが問題であると感じていた。つまり、学習指導案がどのようなものであり、それをどう利用して授業を行うのか、分からないままに悩んでいるのである。そのことがずっと気になっていたので、社会 I A・I B の授業で、やがて教育実習に赴くはずの学生たちが少しでも余裕を持って「研究授業」に取り組むことができるように、という思いで力を注いできた。その成果は、学生が教育実習を実際に体験した時に、必ず実感してくれるものと考えている。

#### 4. 模擬授業について

学習指導案が出来上がると、次はそれを基にして「授業」を行うことになる。しかし、授業を受ける子どもたちはいない。そこで考えたのが、役割分担を定めた「模擬授業」を設定し、その雰囲気だけでも体感させたいということだった。この時間は、演習を中心に授業を進めることになる。

まず「授業者」を決めるのだが、自ら挙手してやろうという学生はほとんどい

ない。そこで、私から指名して授業者を決める。次に、研究授業を参観する教員役を5～6人選抜する。これには多くの学生が希望し、すぐに決定できる。それ以外の学生は、子ども役になってもらう。

模擬授業を始める前に、授業者は、参観教員役の学生に指導案を見せながら、目標や内容や授業展開について説明する。私は子ども役の学生に、何年生のどういう単元か、前時までどう学習を進めて来たか簡単に説明しておく。そして模擬授業に入る。どの学生も、自分の役割分担をよく意識して、積極的に取り組むことができる。時間は5～6分で、私の判断で止める。その後、参観教員役の学生に感想を求め、最後に授業者の感想を話してもらう。このような形式で、全員は無理であるが、できる限り多くの学生に体験してもらうように心がけた。

授業後の学生のアンケートを見ると、「これまでの授業で一番緊張した。でも、おもしろかった」という意見が多く出された。しかし中には、「こんなに難しいことだとは思わなかった。これからが不安になった」という学生も少なからずいた。

私はこの模擬授業を通して、学生は授業者役のことばかり考えているが、参観教員役でも子ども役でも、同じように考えていく必要がある、特に子ども役の時、どう授業者を観るか、その時子どもとしてどう思うか、そこが「授業のポイント」になるということも強調した。

この模擬授業によって、学生の教師に対する視野が大きく広がってきたということを確認に実感している。

## 5. 教師としての構えについて

この授業の最終回に行くことは、私の授業に関する評価を受けることと、学生から率直な質問を受けることである。その内容を見ると、1年生とは思えないような質問も多い。

例えば、「社会科の授業は、先生のやり方でどうにでもなってしまうのではないか?」、「地域を基に学習を進めるということは分かるが、地域を全く知らない」、「資料の出し方や板書の仕方がよく分からない」、「発問によって、授業の方向が変わってしまう気がする。どうしたらよい発問をすることができるか?」等々、私にとっても難しい質問ばかりである。それぞれの質問に対して、私のこれまでの経験を踏まえて丁寧に答えた。しかし、中でも一番躊躇してしまった質問は、「いい先生とは、どんな先生か?」というものであった。一瞬迷ったが、かつて指導を受けた国分康孝先生の講義録を思い出して説明した。

それは、全ての教員が「カウンセリングマインドを持つこと」が大事であるとし、対話のある授業（心のあゝる授業）のできる教員にならなければならないと指導されたことである。学校でのいろいろな事例を挙げながら説明を加えたが、最終的な結論としては「いい教師は、相手の心をつかみ、自分の心を伝えることがうまい」ということであり、そのことがどれだけ学生に伝わったかはわからないが、いつの日か思い出してくれればよいと考えている。

これまでの授業は、学生一人一人の疑問に応えながら学習指導案を中心に進めてきた。社会科の授業だけでなく、他の教科の授業にも通用する話をしてきたつ



もりである。子どもたちは毎日、いろいろな教科の授業を受けている。授業は嫌いだったが、その先生の話は好きだった、というのもよくあることである。授業中の先生の言葉ひとつで、大きな自信を持つことができるようになったり、逆に傷ついてしまうこともある。先生の言葉には重みがあるということも忘れてはならない。常に「子ども」について深く考え、気持ちを込めて対応していくことが「教師の基本的な構え」であると考え、本授業の中で伝え続けてきた。

学生の様子を見ていると、初回の授業時に比べると後半は顔つき眼つきまで変わってくる。この姿勢をいつまでも保持して欲しいと願っている。

### Ⅲ おわりに

以上が、新しく大学生になった1年生に対して行ってきた社会ⅠA・ⅠBの授業の実践録である。ある仮説を立てて結果を求めていくものではなく、毎回の授業の中で、どこで学生がつまづいているのか、何を求めているのかを絶えず観察・注視しながら進めてきたものである。したがって、授業が計画通りに進まなかったこともある。特に学習指導案作成においては、学生間の差が大きく、全く白紙状態の学生に対しては、説明を加えてなんとか書かせるのが精いっぱいであった。こういった状況で、時間配分が当初の予定から大幅に狂ったこともあった。

各時間ごとに意見を書いてもらったが、回を追う毎に疑問点や質問内容が高度になり、成長の様子を伺うことができうれしくなることもあった。一方で、いつまでも理解が深まらず、同じような質問をされて対応に苦慮することもあった。

一連の授業では、小学校社会科の授業をどう成立させるか、ということが大きな目標であった。細かな箇所はともかく、ほぼ目標は達成することができたと思う。しかし一方で、社会よりも他の教科や教育実習についての関心の方が強いと感じることもあった。しかし、どの教科を教えるにしてもその基本は同じであることを、他の教科についての事例を説明し理解させるよう努めた。

教育実習については、今は「授業」ができるようにしておくことを第一とした。しかし、学生の本音は「学校の様子を知りたい」ということである。そこを考慮して、私自身がこれまで経験した学校現場の話を取り入れた。例えば、学校で行われている研修（授業研究）について、諸行事（社会科見学、運動会、音楽会、遠足等）への関わり方、生徒指導、保護者との関わり方、部活動、進路指導（主に中学校）、そして学校で起こったいろいろな「事件」についてである。90分間の授業の中では、集中が途切れることはよくある。そんな時、「現場では…」の言葉で、一瞬で目を輝かす学生が多い。さすが教師を目指している学生だな、と再確認したものである。

学生全体に対して「何か質問はありますか？」と聞いても無言なので、何も無いのかと思っていると、授業終了後にあれこれと聞きに来る学生も多い。そんな時私は「教師を目指す者は自分の思っていることをみんなの前で話すこと、これがまず一歩」と論じている。私の授業に積極的に取り組んでくれた学生に感謝するとともに、これからのさらなる成長に期待している。

## 参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領解説（社会編）』東洋館出版，2008年

静岡県教育委員会『静岡県版カリキュラム社会（小学校・中学校）』，2005年

静岡県教育委員会『静岡の子どもに「確かな学力」を』，2004年

静岡県地域学習資料研究会『静岡県の歴史』光文書院，1984年

『斎藤喜博全集』6，国土社，1990年

静岡県教育委員会『初任者研修資料』，2006年

国分康孝「学校における教育相談」（教育相談担当教員養成研修会における講義ノートより），  
1983年